

毎日新聞 7月20日朝刊 連載『明日がみえますか(死と向き合う)』

「今のままでは自分の代で寺が途絶える」。江戸時代から250年以上の歴史がある大阪市天王寺区の柳谷観音大阪別院・泰聖寺の副住職、純空壮宏さん(40)は5年前、ある決断をした。インターネットを通じた「派遣僧侶サービス」への登録だ。

抱える檀家(だんか)だけでは寺の運営は難しく、ネットの力に縁の広がりを託した。「日本全国 定額お布施」「檀家になる必要なし」。ネット上には今、こんなうたい文句のサイトがあふれ、通販大手のアマゾンも2015年から仲介業者として参入した。

新たな収入源を探る寺側と、「不明瞭なお布施相場」に不満を持つ利用者側の利害が一致し、市場は急拡大する。純空さんはケアマネジャーだったが、泰聖寺住職の叔父が脳出血で倒れ、30歳で仏門に入った。4年の修行を経て12年に副住職に就いた。檀家は約70軒で、葬儀と法要の依頼は年間約40件。当初の月収は15万円に満たず、家賃約4万円のマンションで新婚の妻と暮らす苦しい生活だったが、間もなく僧侶を派遣する複数の仲介業者から誘われた。「どんな形であれ、仕事を増やせば縁も広がる」と信じ登録を決めた。

昨年の葬儀は約130件、法要が数百件と、依頼は急増した。土日は法事を1日8軒も回る忙しさだ。業者への仲介料を除く1件当たりの収入は葬儀3万~10万円、法要2万円ほど。年収は1000万円を超え、念願の庫裡建立と本堂改修も果たした。事情を檀家にも説明し、理解を得ている。その代わり、定期的な半強制的寄付金は募らない。若手僧侶を集めた勉強会も開き、どうすれば利用者に喜ばれ、派遣依頼が増えるかどうかまでアドバイスをする。これとは別に、宗派に関係なく遺骨を合祀(ごうし)して弔う納骨堂の運営やペット供養も始めた。縁を自力でたぐり寄せ、これまでの檀家制度とは違う寺のあり方を模索する。派遣僧侶サービスは5年ほど前から注目され始め、10以上の団体が参入する。

12年に仲介サイト「てらくる」を始めた運営会社は全国約650の寺院と提携し、葬儀の「お布施」の最低価格を5万5000円に設定。法要は4万5000円で、月2000件以上の依頼があるという。

ただ、主要宗派が加盟する全日本仏教会(東京都)は拡大する業界に対し、「宗教行為を商品として販売することを許している国はないのではないか。お布施はサービスの対価ではない」との声明を出し、波紋も広がる。派遣された僧侶が過去の利用者から直接依頼を受けても、再び業者を通すのがルールだ。だが、関西のある僧侶は「業者より低額を示し、直接受けることもある」と明かす。「業者側は仏教界の隙(すき)を突いて商売を始めた。この好機を逃したくないし、罪悪感もない」。こう言い放つ僧侶は、檀家や信者を増やすことを最優先する。

「やっぱりよく知る檀家さんらを送ってあげたい。その上で、その家族と一緒に死を受け止めたい」

【サブタイトル 僧侶ネット派遣、急増】